平成９年度郷土史講座資料

平成９年度

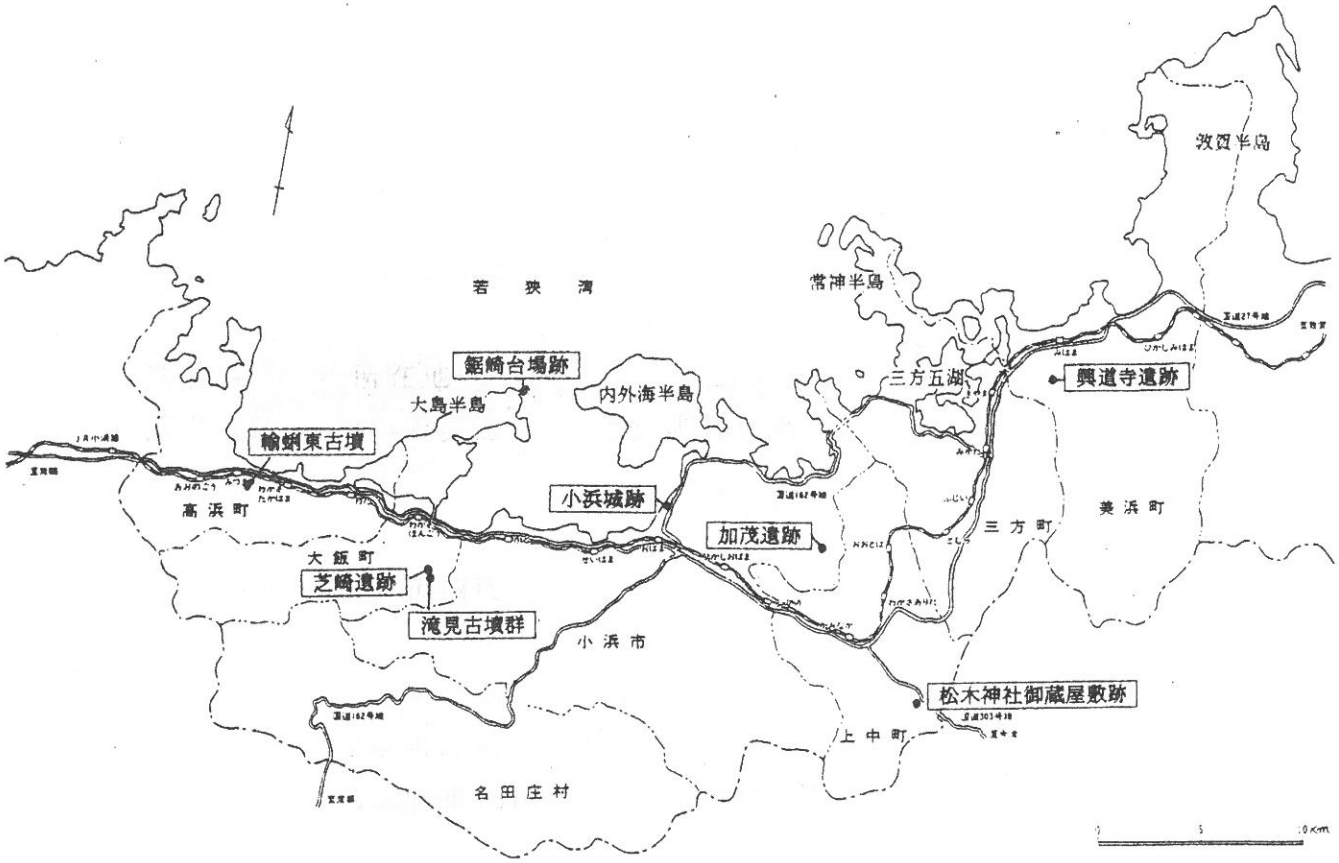
若狭地方における発掘調査の成果

平成10年３月15日（日）

福井県立若狭歴史民俗資料館

平成９年度の主な発掘・試掘調査遺跡

遺跡名	所在地	調査主体	時代
・興道寺遺跡	美浜町興道寺	美浜町教育委員会	古墳・奈良時代
・松木神社御蔵屋敷跡	上中町熊川	上中町教育委員会	江戸時代
・加茂遺跡	小浜市加茂	県埋蔵文化財調査センター	弥生・奈良時代
・小浜城跡	小浜市城内	小浜市教育委員会	江戸時代
・鋸崎台場跡	大飯町大島	大飯町教育委員会	江戸時代
・芝崎遺跡	大飯町芝崎	県埋蔵文化財調査センター	弥生～飛鳥時代
・滝見古墳群	大飯町野尻	県埋蔵文化財調査センター	古墳時代
・輸蝋東古墳	高浜町東三松	高浜町教育委員会	古墳時代



遺　跡　位　置　図

興　道　寺　遺　跡

所　在　地	福井県三方郡美浜町興道寺土井ノ上
調査原因	地元企業社屋建設に伴う事前調査
調査主体	美浜町教育委員会
調査担当者	松葉　竜司
調査期間	平成９年１０月２６日～平成９年１２月２６日
調査面積	約１，１００㎡
時　　代	７世紀前半～９世紀

遺跡の環境

興道寺遺跡は美浜町の中心を南北に流れる耳川の左岸、耳川の河川活動によって形成された河岸段丘上に立地します。海抜は約２０～２１ｍです。

興道寺地区には古墳時代から奈良時代にかけての多くの遺跡が存在します。興道寺遺跡の南方に位置する興道寺窯跡、西方の興道寺古墳群、東方の観音畑廃寺などは美浜の古代史を探る上で無視できない遺跡です。また、当然、興道寺地区にはこれらの遺跡を支えた人々の、古墳時代から奈良時代までの大規模な集落遺跡が存在した可能性が指摘できます。

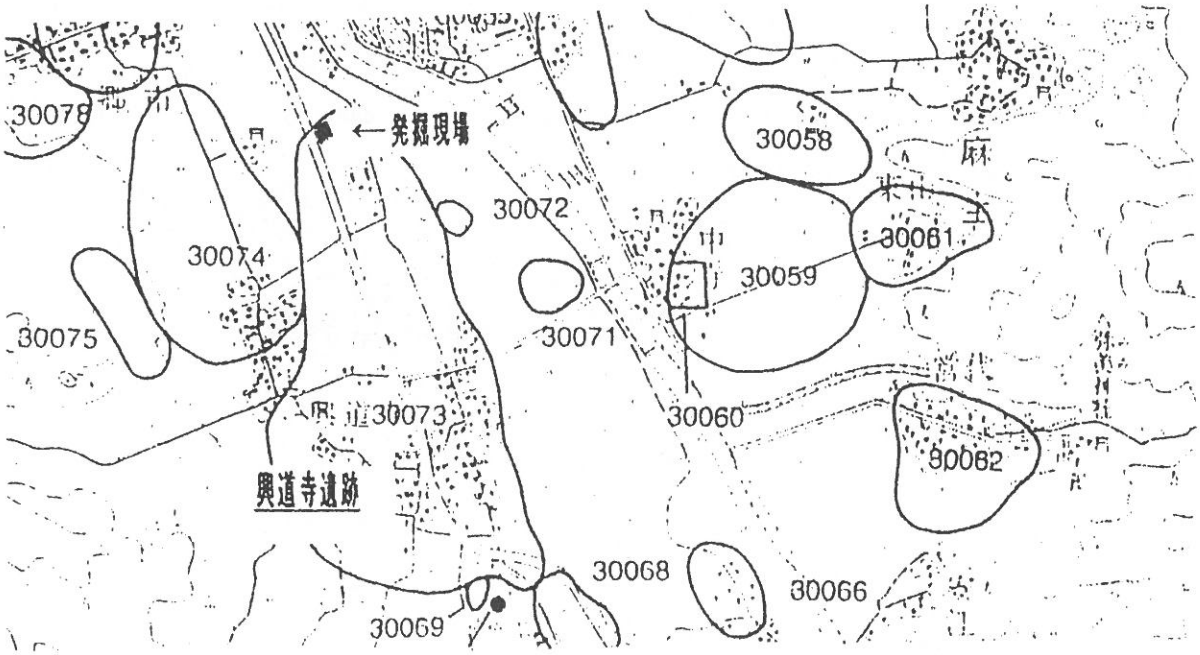


図１　　興道寺遺跡周辺の環境

調査の概要

「遺構」竪穴式住居址４棟、掘立柱建物跡１棟（これまでのところ）、土壙３０基以上、溝状遺構１基、柱穴３００基以上などが確認されています。

竪穴式住居址１（ＳＢ１）

ＳＢ１は一辺が約５ｍの、上から見るとほぼ正方形の住居址です。付随する施設は貯蔵穴とみられる土壙、支柱穴１基が確認されたに留まりました。

この住居址は地山をなだらかなレンズ状に掘り込み、低い部分に黒褐色粘砂土を埋め込み、それを覆うように粘土を貼り付ける技法（貼り床）で構築されたことを確認しました。

住居址の床面から平瓦２点、覆土から須恵器、土師器、製塩土器の破片が多く出土しています。

竪穴式住居址２（ＳＢ２）

ＳＢ２は一辺が約３ｍのほぼ正方形の住居址です。この住居址の南壁に付随して（東から）かまど跡、貯蔵穴が、住居址中央付近に浅い土壙が確認されました。

ＳＢ１とは異なり貼り床はしていませんでしたが、床面には硬化面がみられました。

住居址の床面からはほとんど遺物がみられませんでしたが、かまど跡、貯蔵穴付近から多くの土師器、製塩土器の破片が出土しています。

ＳＢ２の南西近くには、ＳＢ２に付随する倉庫的役割をしたと考えられる掘立柱建物跡１（ＳＨ１）がみられます。

土器溜り２（ＳＸ２）

ＳＸ２からはコンテナ５箱に及ぶ、８世紀代を主体とする須恵器、土師器、製塩土器、瓦の破片が見つかっています。７世紀前半から９世紀代までのものもみられます。遺構の西側より集中的に出土しました。

「遺物」須恵器（坏Ｂ・坏蓋Ｂ・甕が主体）、土師器（甕が主体）、製塩土器（浜禰ⅡＢ式、船岡式が主体）、瓦（平瓦）、ふいご羽口、鉄製品（鉄釘・鉄クズ）が出土しています。須恵器、土師器、製塩土器がほとんどです。

須恵器

外面底部に高台を持つ坏、外面天井部につまみを持つ坏蓋がほとんどです。８世紀前半のものが主体を占めます。

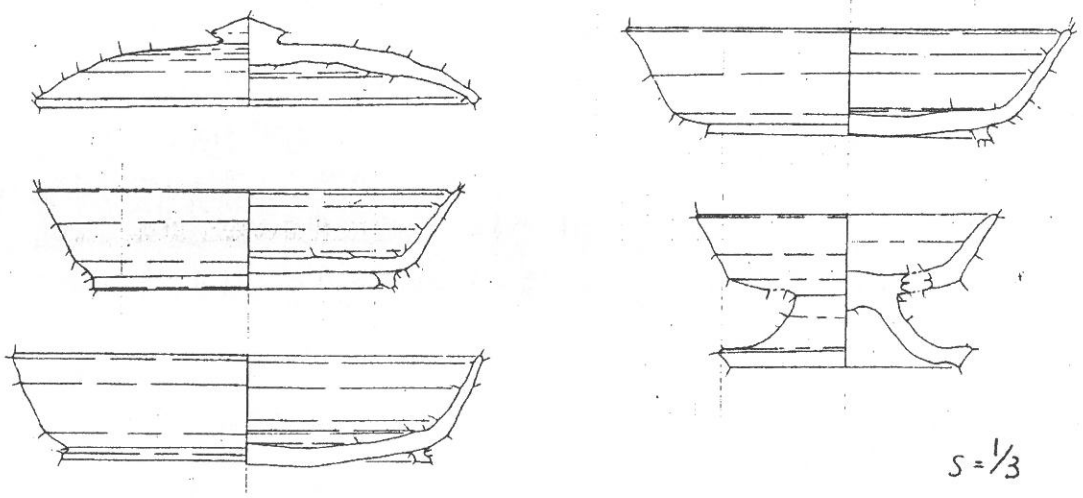


図２　　ＳＸ２遺物実測図

土師器

甕がほとんどですが、奈良・京都などの都城遺跡で大量に出土する土器の内面に放射線状、渦巻文状の暗文を施した坏・皿も十数個体確認されました。これらは緻密な粘土を用い、精巧に暗文を施し、また赤く着色するものもみられることから、大概のものは在地のものとは考えにくく、都（藤原京、平城京）との関連のなかでもたらされたのでしょうか。

製塩土器

若狭の製塩土器編年で浜禰ⅡＢ式（６世紀から７世紀）、船岡式（８世紀）が主体を占めます。内陸の遺跡としては多量の製塩土器が出土しました。口径か小さく、砲弾型を呈すると考えられる製塩土器もみられます。焼塩に用いられたものと考えられます。

まとめ

調査の結果、遺跡の特徴として挙げられる点を指摘します。

１．多量の製塩土器の出土

興道寺遺跡のように海岸線から距離のある内陸の遺跡から出土する製塩土器の量としては異常です。

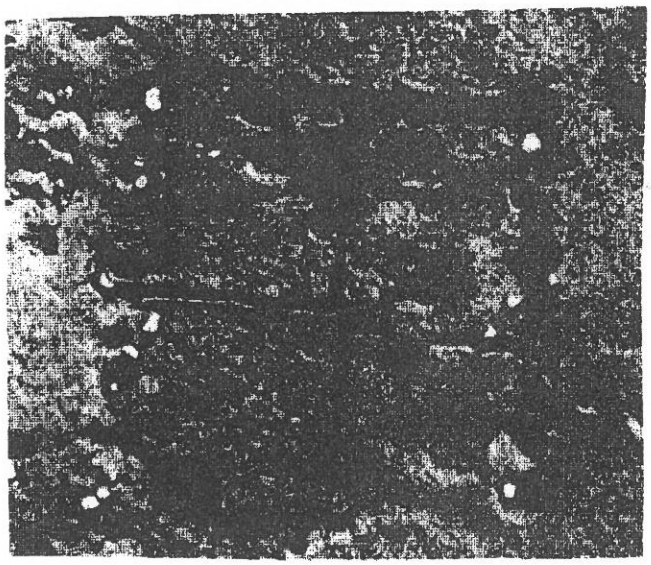
２．畿内でみられる土師器の出土

奈良の都のものと非常につながりの深い土師器（坏・皿）が出土しています。

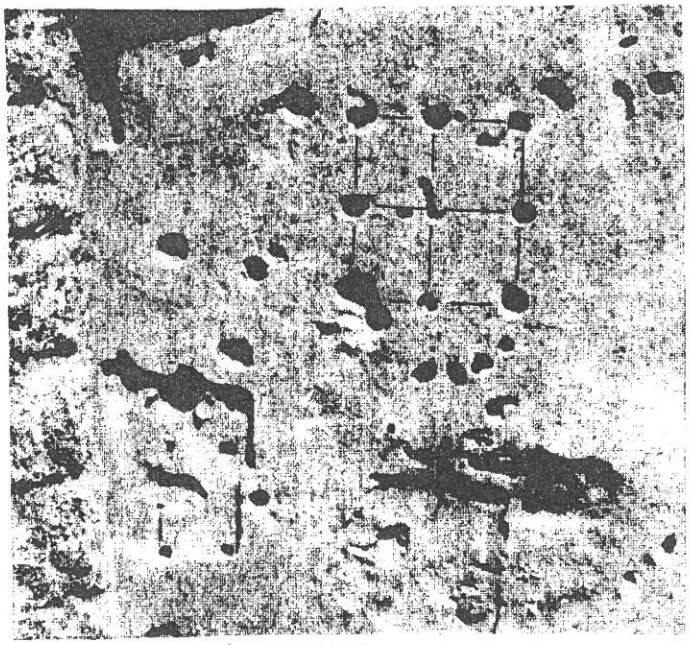
３．鉄製品、ふいご羽口の出土

興道寺遺跡が鍛冶関連の施設を持っていた可能性があります。

興道寺遺跡の性格を考えると、現段階で考えられる可能性として寺院（観音畑廃寺）に関連する施設が存在したといえるのではないでしょうか。

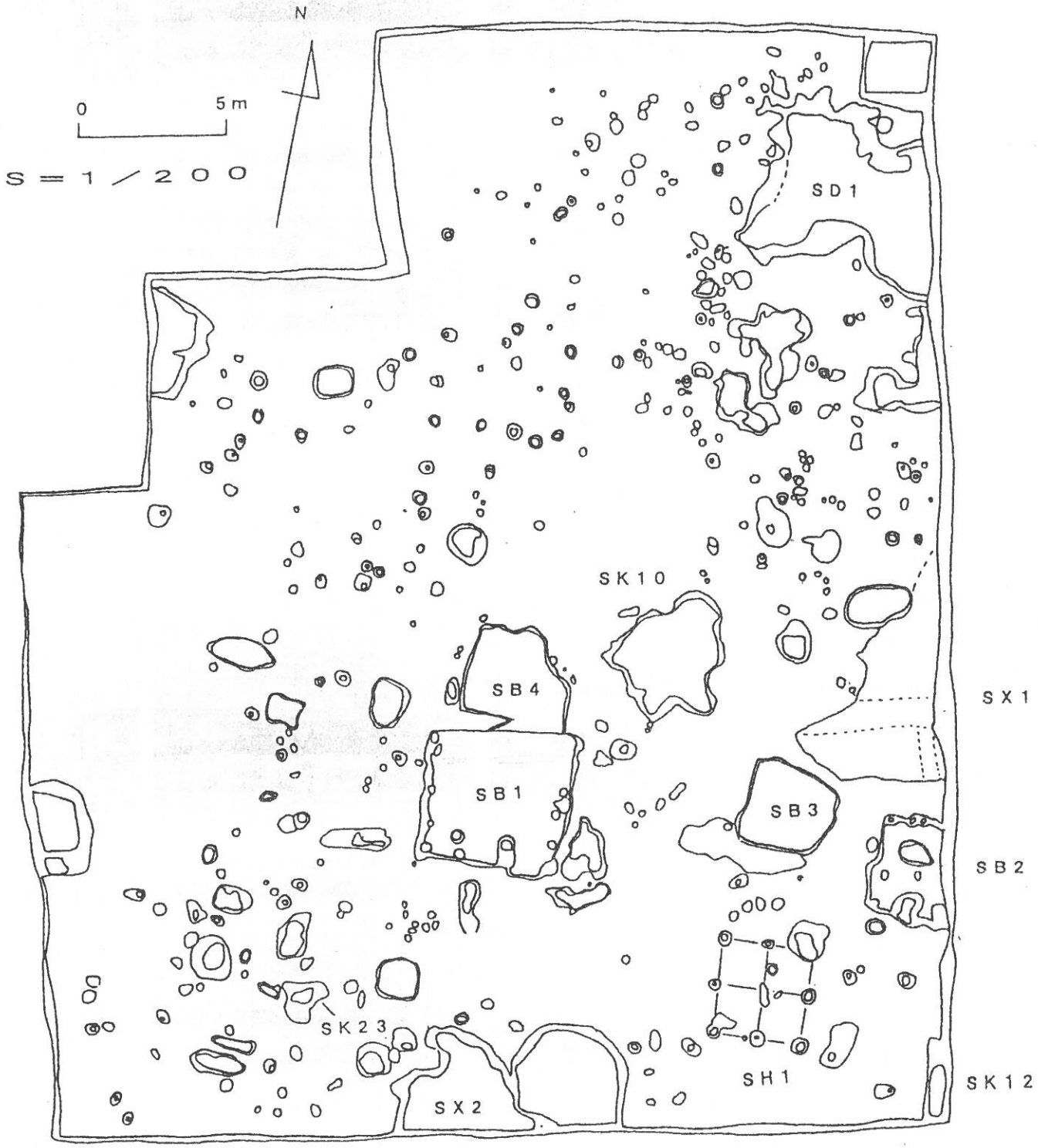


SB1



SB2・SH1

興道寺遺跡調査区遺構平面図



若狭小浜城跡

所在地	小浜市城内１丁目
調査原因	小浜市公共下水道管渠布設工事
調査期間	平成９年４月１０日～平成９年１１月１８日
調査主体	小浜市教育委員会
調査担当	松川雅弘・下仲隆浩
時代	江戸時代

《調査の概要》

慶長5年（1600）9月、関ヶ原合戦における大津籠城の功により若狭一国を封じられた京極高次は、戦国期的な山城である旧来の後瀬山城を廃し、翌慶長6年より近世大名の居城にふさわしい平城の築城を雲浜の地において開始する。幕府による再三の課役により城普請は一向に進まなかったが、寛永11年（1634）の酒井忠勝入部後は、天守閣、各櫓が相次いで普請され、寛永19年の大手口の造営により一応の完成を見た。総構規模は、18,937坪（62,492㎡）で、近世城郭としてはさほど大きなものではないが、南北両河川と小浜湾を利用した「水城」であり、屈折を巧に配した見事な縄張りといえる。

現在の小浜城跡は、天守台を含む本丸石垣の2／3を残すのみで、往時の姿は留めていない。しかしながら、昭和54～57年に一級河川多田川の改修工事などに先だって実施された調査では、上部遺構は殆ど削平を受けているものの、石垣基底部及び若干の遺構は残存していることが確認されている。よって現在宅地となっている城内一、二丁目においても、以前から同様の遺構の存在は想定されていた。

今回の調査は、下水道管渠布設部分を幅1.5mのトレンチ調査で対応した。また、城絵図などの史料も積極的に活用し、遺構の深査を行った。

《調査結果》

本丸内堀に面する石垣を５か所、三の丸建物跡を２か所確認している。調査区ごとの遺構概要は次のとおりである。

●内堀本丸側石垣の調査（Ｔ１、Ｔ２、Ｔ３、Ｔ４）

内堀に面する本丸東側石垣を合計４ヶ所確認している。既に櫓台などの上部遺構は破壊されているため、内堀水面下と考えられる部分の石垣のみ検出されている。南側石垣（Ｔ１、Ｔ２）は1m強の自然石を使用して構築されている。特徴的なのは、石垣合込から裏込めの一部を赤褐色土で仕上げている点である。他の石垣とは異なる構築様相を呈しており、中世城館に見られる土塁に張石を施した石塁に形状は酷似しているため、古様の構築とも考えられるが、現段階では断定することはできない。北側の２ヵ所（Ｔ３、Ｔ４）は、50㎝内外の小ぶりの自然石を用いた、やや粗い野面積みとなっている。

●大手道土橋遺構の調査（Ｔ５）

本丸と二の丸を繋ぐ土橋の東側石垣を確認している（図３）。内堀に架かる橋は合計４本あるが、当該地は唯一の土橋であり、大手門から続く最も重要な往来である。遺構面はかなり近代の撹乱を受けているが、検出遺構面の海抜高は土橋中央部で約1.3m、本丸外桝形付近で約1.6mを測る。石垣は合計４段を検出しているが、安全面の問題から最下部までは検出していない。また、石垣最上部は不均一であり、検出遺構面をほぼ土橋遺構面であると考えると、石垣の最上部の１石は抜き取られていると推測される。構造は、上部２段（抜石を合わせると３段）を花崗岩の切石を使って丁寧に積んでおり、下部２段は自然石を用いて構築している。内堀水面高は、ほぼこの石垣差異部分と推定され（海抜0.3m）、下層には松葉やヒシの実が堆積すると共に、廃城時に廃棄されたと考えられる塀瓦が多量に検出されている。意図的に水面上部の景観を考慮した石垣構築であろうか、本丸と二の丸を繋ぐ土橋でもあり、最も景観的配慮が必要な部分ではある。しかし、地震などにより度々石垣修理が行われており、石垣上部のみが崩壊したために、花崗岩切石で部分修理を行った痕跡とも考えられる。

●三の丸遺構の調査（Ｔ６、Ｔ７）

三の丸米蔵に関連した石垣及び礎石を検出している。石垣は花崗岩の切石を使用しており、合計３段残存している（Ｔ６）。石垣最下部に胴木などの基礎構造は確認されていないが、最下部の石垣表に長方形石材が階段状に１段築かれている。石垣の法は急勾配で、それほど高いものとは考えられない。総延長で2.5mを検出している。この石垣は、昭和55年度の調査で検出された籾蔵跡排水溝と同じ形態であり、その遺構と同一直線でつながるものである。よって、三の丸の雨水や汚水を内堀または外堀へ導く排水溝の東壁と考えられる。残念ながら溝西壁は確認されなかったが、前回調査時で明らかになっている溝の規模は、上幅1.1m、底幅0.7m、深さ0.6m以上である。なおトレンチ南側でも、この遺構と同一線上となる石垣根石列を検出している。絵図の位置的には扶持方蔵と十番蔵があった付近であり、溝の東壁とそれら建物の境界を兼ねた石垣の根石と考えられる。よって、この溝は三の丸米蔵群と犬走りの境界を、内堀と平行に流れていたと推測される。

礎石は合計で６石検出しており、花崗岩の切石及び丸石を使用している（Ｔ７）・（図４）。絵図から、八、九、十番米蔵の建物に伴うものと推測される。検出遺構面に伴う４つの礎石と、絵図の照合から割り出される九番蔵の規模は、間口11.9m、奥行7.5mで面積は約89㎡となる。同じ棟続きの七、八、十番蔵も同一規模と考えられる。２石は下層からの検出であり、ともに黄色粘質土層（三和土状）で構成される明確な遺構面を持ち、最低２回の敷地造成を伴う改築を行っていることが伺える（図４－②）。

《ま と め》

今回の調査は、調査区域が狭いため平面的な遺構把握ができていない。しかしながら内堀に面する本丸東側石垣の検出により、ほぼ正確な本丸の広さを確定することができた。また、三の丸の米蔵跡では、二度の敷地造成と礎石の据え直しを確認できた。石垣は、場所により石材及び石積みの差異が認められるため、今後の調査も踏まえて石垣の構築及び修理の歴史をとらえていかなければならない。（下 仲）

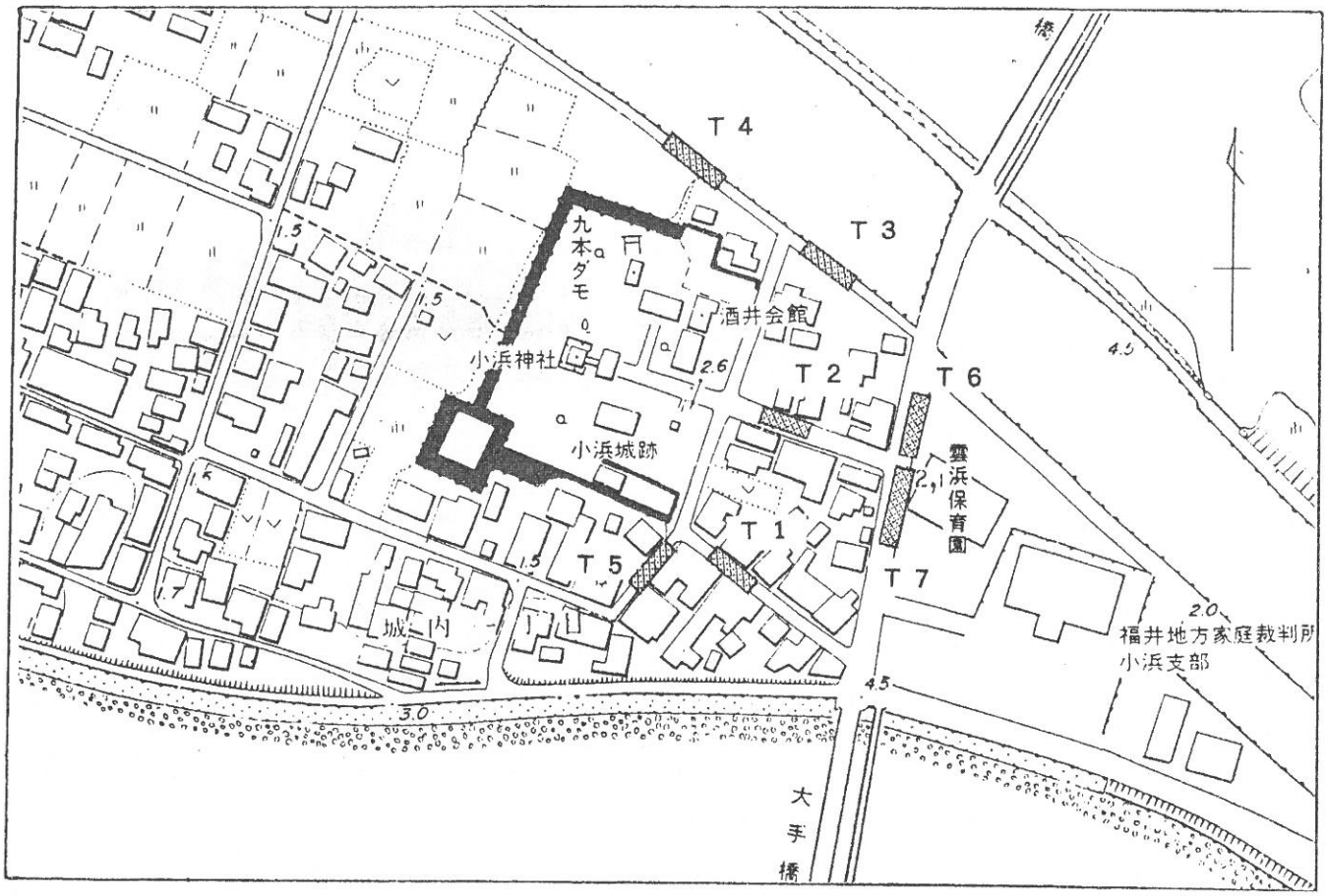


図1　トレンチ位置図
（黒塗：本丸残存石垣）

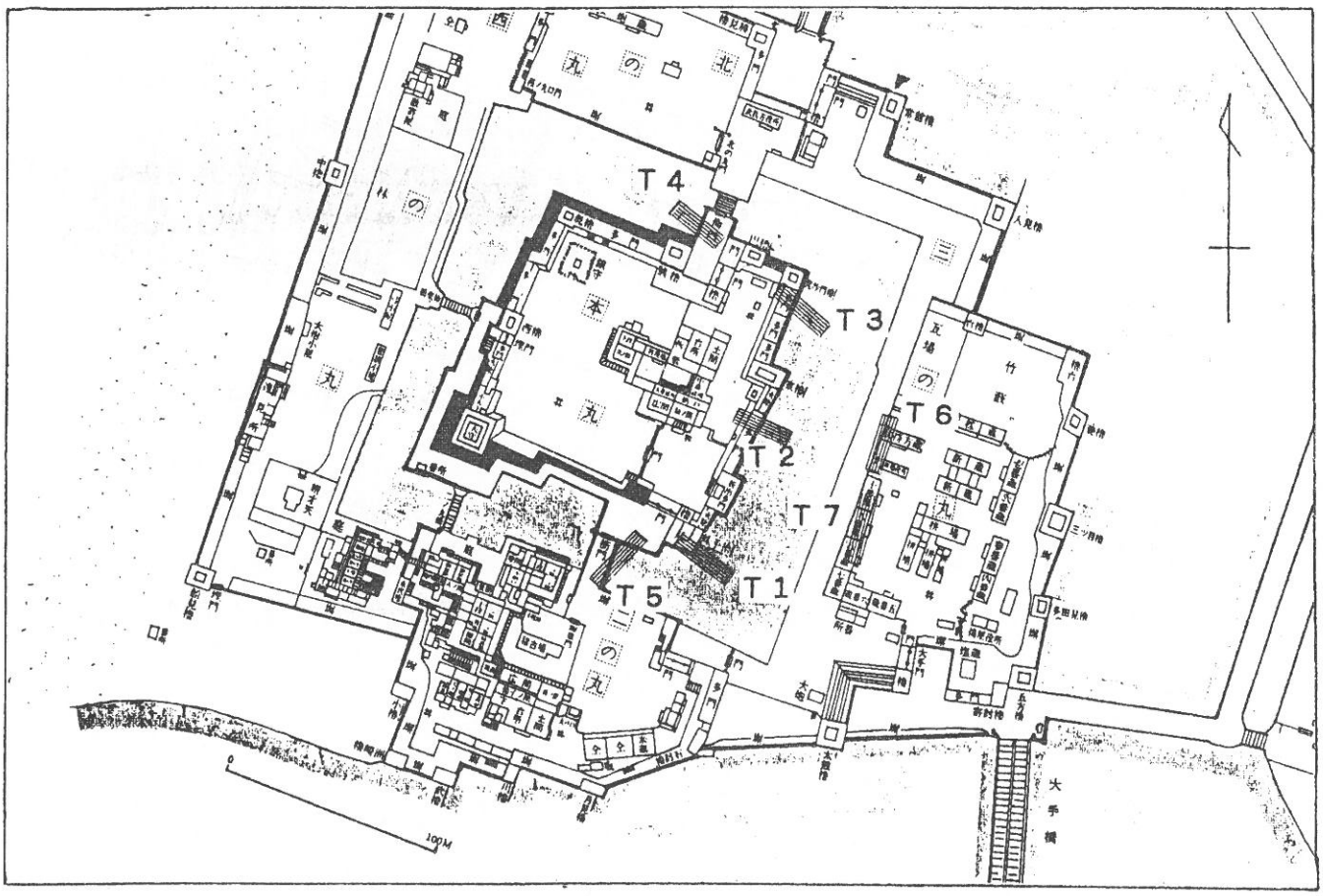
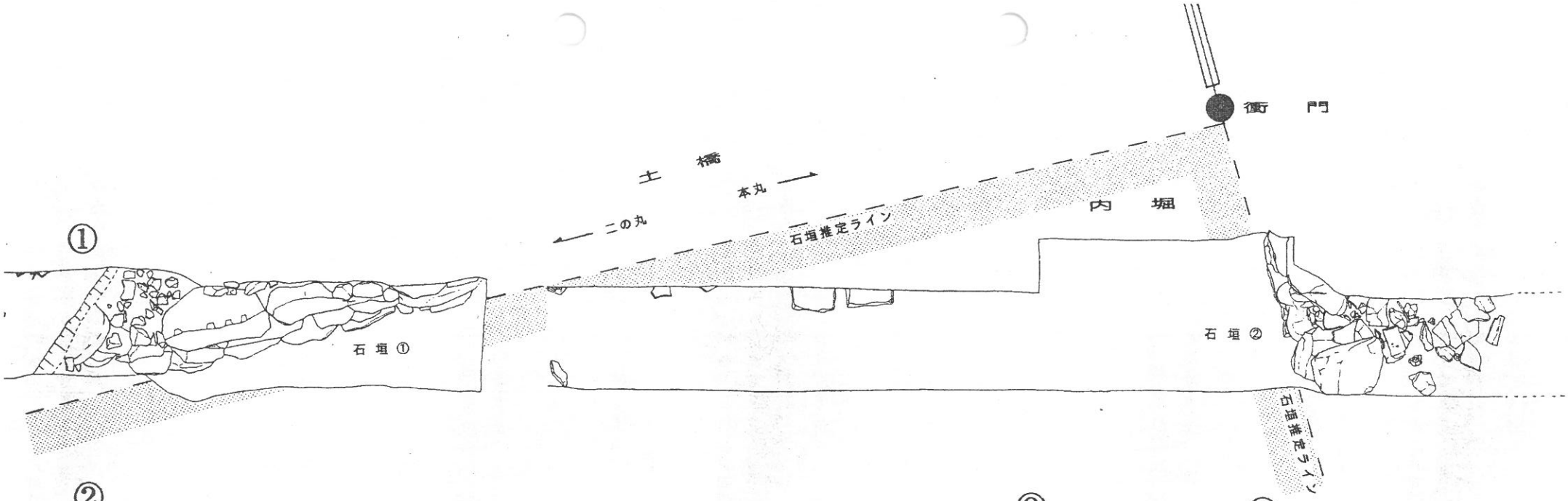
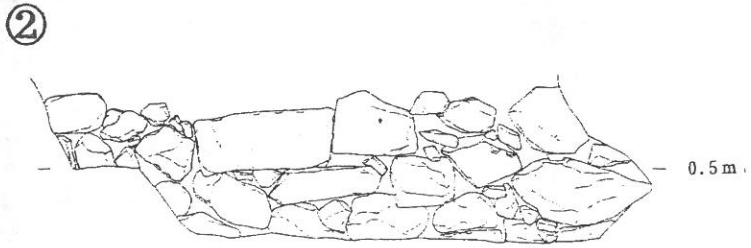
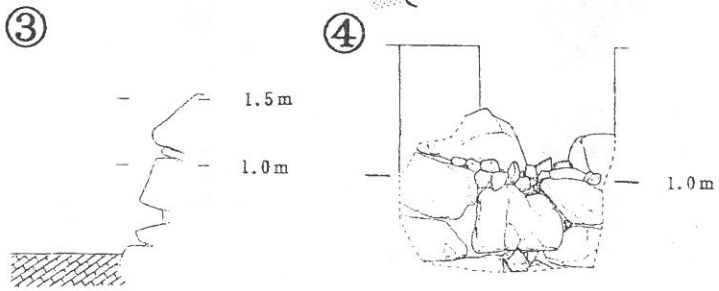


図2　安政一慶応頃の小浜城絵図（小浜神社蔵）







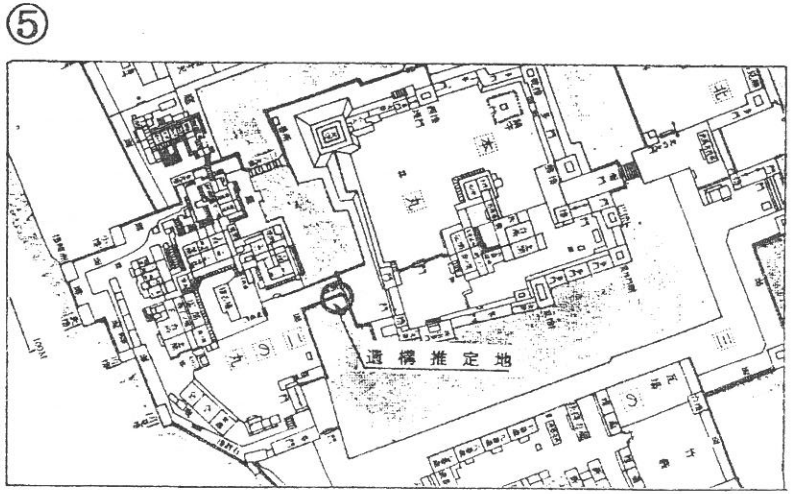


図3　T 5遺構実測図

① 遺構平面図
② 石垣1立面図
③ 石垣2断面図
④ 石垣2立面図
⑤ 検出遺構推定位置図

0　5m

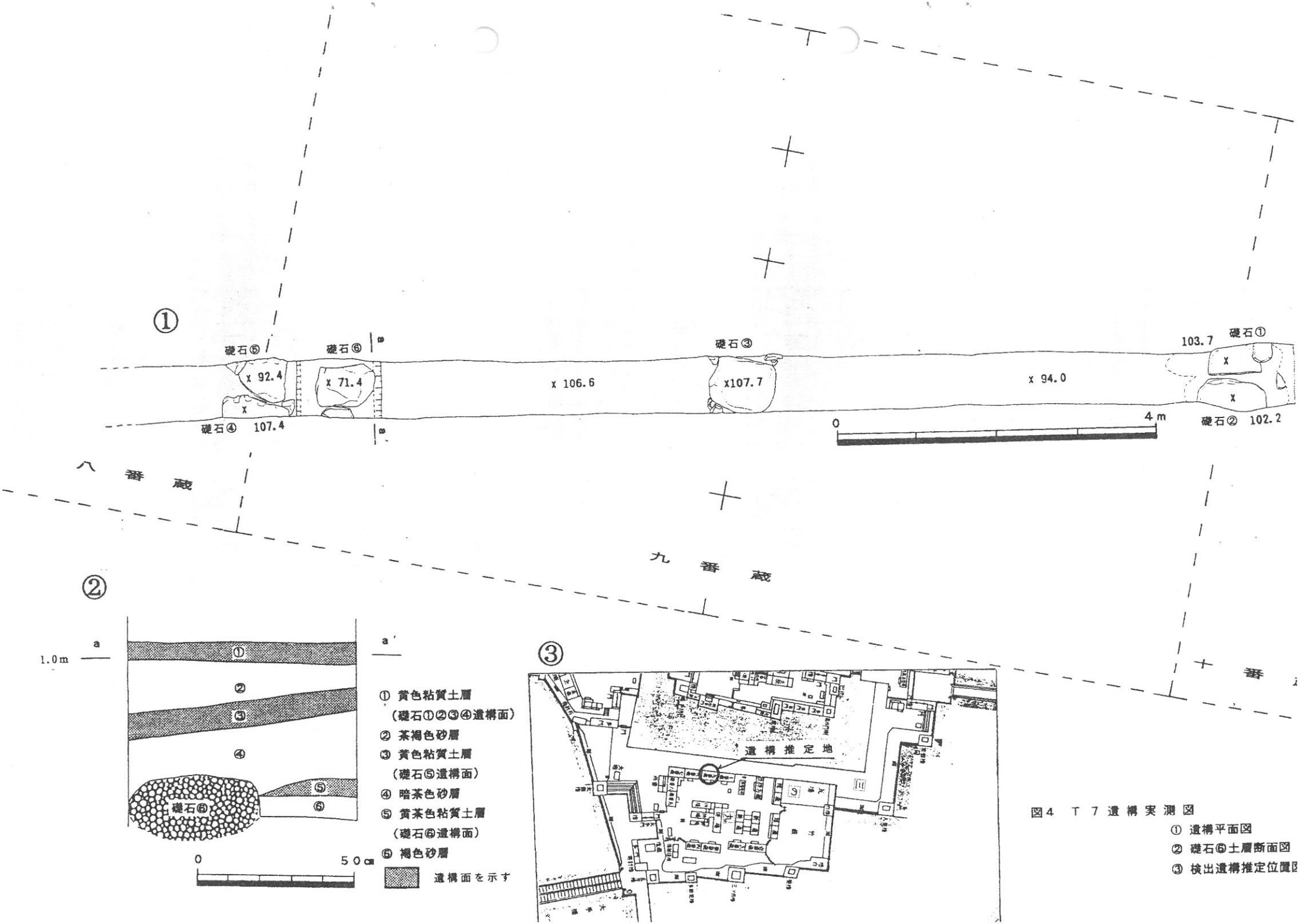


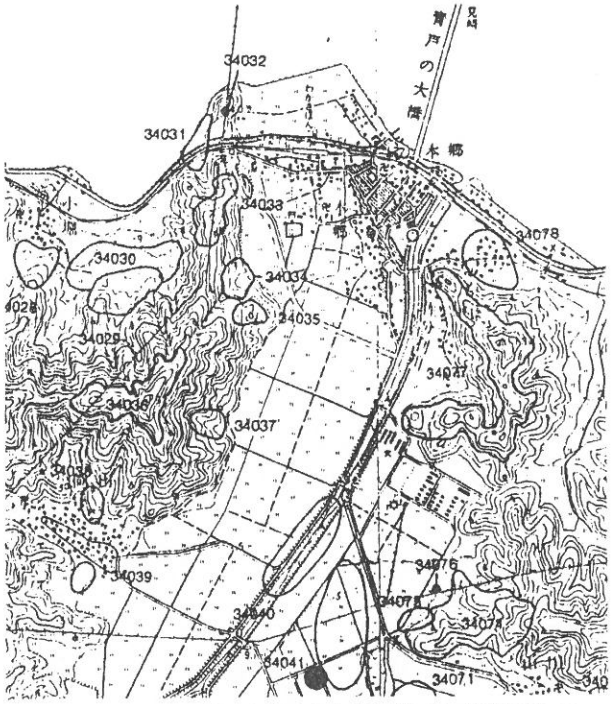
図4　T 7 遺構実測図

① 遺構平面図

② 礎石⑥土層断面図

③ 検出遺構推定位置図

遺跡名　　芝崎遺跡
所在地　　福井県大飯郡大飯町芝崎
調査原因　　近畿自動車道敦賀線
　　工事用道路大津呂線(県道岡田深谷線)
調査期間　　平成９年６月２日～平成９年11月20日
調査主体　　福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査担当者　　赤澤徳明・御嶽貞義
調査面積　　調査対象面積　　４，９００㎡
　　(うち実調査面積　　約2,０００㎡)
時　　期　　弥生時代後期～古墳時代初頭
　　(３世紀後半～４世紀)
　　古墳時代後期～飛鳥時代
　　(７世紀初頭～中頃)



《調査の概要》

芝崎遺跡は、芝崎集落の北東、山田集落の西側に位置する。調査対象地が比較的交通量の多い道路であるため、便宜上Ａ～Ｄの４つの調査区に分けて、道路の片側ずつ調査を行った。

なお道路の中央部分は、上下水道などのパイプが数本敷設されているため、調査することができなかった。そのため調査区間に約３～４ｍの間隔が開いてしまった。また先回の圃場整備の際の重機の爪痕が遺構面に及んでおり、一調査区の幅は約1.5～3.5ｍと狭いもので、調査中に遺構の性格を判断するのは、難しかった。

《調査の結果》

最初の調査区で確認できたものは、１・２号住居（当初、2号住居については小さな古墳の可能性も考えていた)であった。調査終了後、図面を合わせてみることで、竪穴住居状の遺構３棟以上･掘立建柱建物２棟以上の存在を確認できた。また当初は撹乱と考えていたが、小河川の痕跡と思われるものも１条確認した。

◎１号住居は隅丸方形を呈し、規模は約９ｍである。住居内には壁溝がある。また柱痕が一列に並ぶものの、住居趾外にまで続いており１号住居との関係は検討中である。

◎２号住居は隅丸方形を呈し、規模は約12ｍである。柱根が残るが外周溝を挟んで存在しており、１号住居同様検討中である。

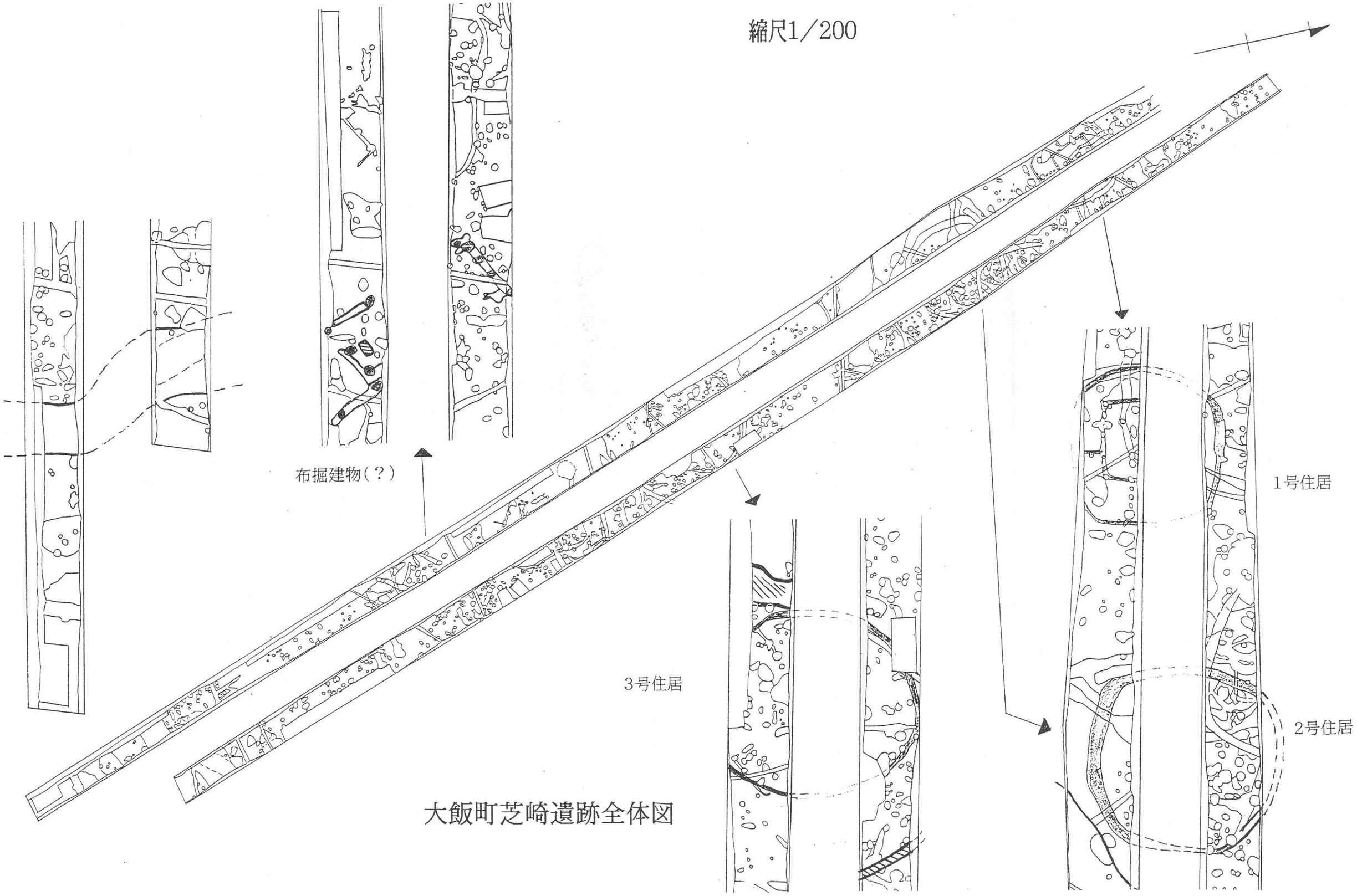
◎３号住居は楕円形を呈し、規模は長軸約15ｍと推定される。他の住居より削平の度合いが強く残りが悪い。住居北側の大きめの土坑には、須恵器・土師器などが落ち込んでいた。
なお住居とは関連がないが南側の溝から二重口縁壷など古式土師器が集中して出土した。

◎掘立柱建物は布堀状の柱穴をもつが、欠ける部分が多いため棟数が定かでない。確認できる部分で一棟建ち上がるとしたら、その規模は約10×５ｍとなる。
なお建物とは関連がないと思われるが、柱穴に囲まれる部分にあたる土坑から、鉢の上に壷を置いた、二段重ねの状態で出土している。時期は庄内式から布留式（古墳時代の初め）にかかるものである。

◎河川は幅３～５ｍの小川である。当初は撹乱と考えていたが、円礫に混じって土器片が出土した。深さは検出面より40㎝程度で、その下は地山の礫層へと続く。

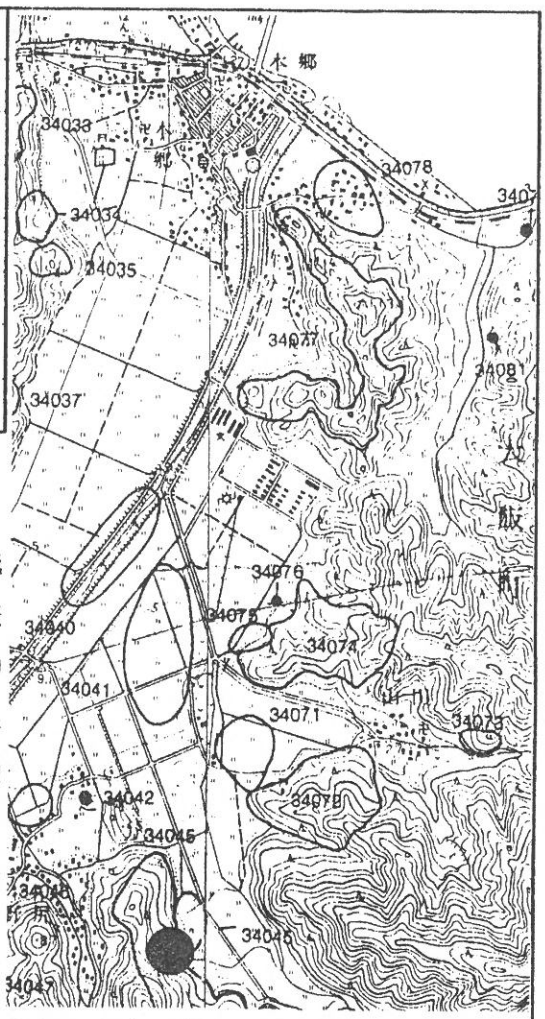
以上が、現在において確認されている比較的明確な遺構である。

縮尺1/200



大飯町芝崎遺跡全体図

遺 跡 名	滝見(たきび)古墳群
所 在 地	福井県大飯郡大飯町野尻
調査原因	近畿自動車道敦賀線建設事業
調査期間	平成９年10月１日～平成９年12月19日
調査主体	福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
調査担当者	赤澤徳明・御嶽貞義
調査面積	６２５㎡
時 代	古墳時代



《調査の概要》

滝見古墳群は、昭和33年から36年(1958~1961)の４ケ年に渡り、同志社大学大飯町考古学調査団が佐分利川流域に古墳を遺した人々の生活基盤を考究する目的で調査が実施され、これにより野尻集落の東側、南より北へ伸びる尾根の東斜面に24基、対峙する位置に７基の計31基からなる古墳群であることが確認された。このうち昭和34年(1959)に10・11・16号墳が同志社大学考古学調査団により発掘調査され、昭和53年(1978)には県営圃場整備事業の事前調査で、大飯町教育委員会が27号墳を調査している。今回の調査は前述したものに含まれない可能性のある古墳３基が、近畿自動車道敦賀線建設により破壊されるため、緊急におこなった発掘調査である。工事範囲にかかる古墳の仮称を滝見Ａ・Ｂ・Ｃ古墳とし、将来線にかかるＢ・Ｃ古墳は調査を実施せず、今回工事車両搬入道路建設に伴うＡ古墳について調査を実施した。

調査前の古墳の状況は、墳丘の封土が山崩れのため多量に谷側に流れており、石室の天井石及び側壁の一部が露出し、墳丘の裾なども明確には確認できなかった。Ａ古墳は標高59～60ｍに位置し、墳丘の規模は最大径7.5ｍを測り、やや楕円形を呈している。また北西部には全長約４ｍ、幅１ｍの周溝の一部とおもわれるものが確認された。

天井石を外し石室内を精査した結果、羨道が明確ではない横穴式石室を検出した。石室は残存全長3.3ｍ、奥壁幅0.7ｍ、最大幅0.8ｍを測るが、両側壁の上面石がやや谷側に迫り出しており、おそらく墳丘が崩れる際に、封土とともに側壁も谷側に押しだされたためと思われる。玄室に礫床はなく、地山を床面として利用していた。

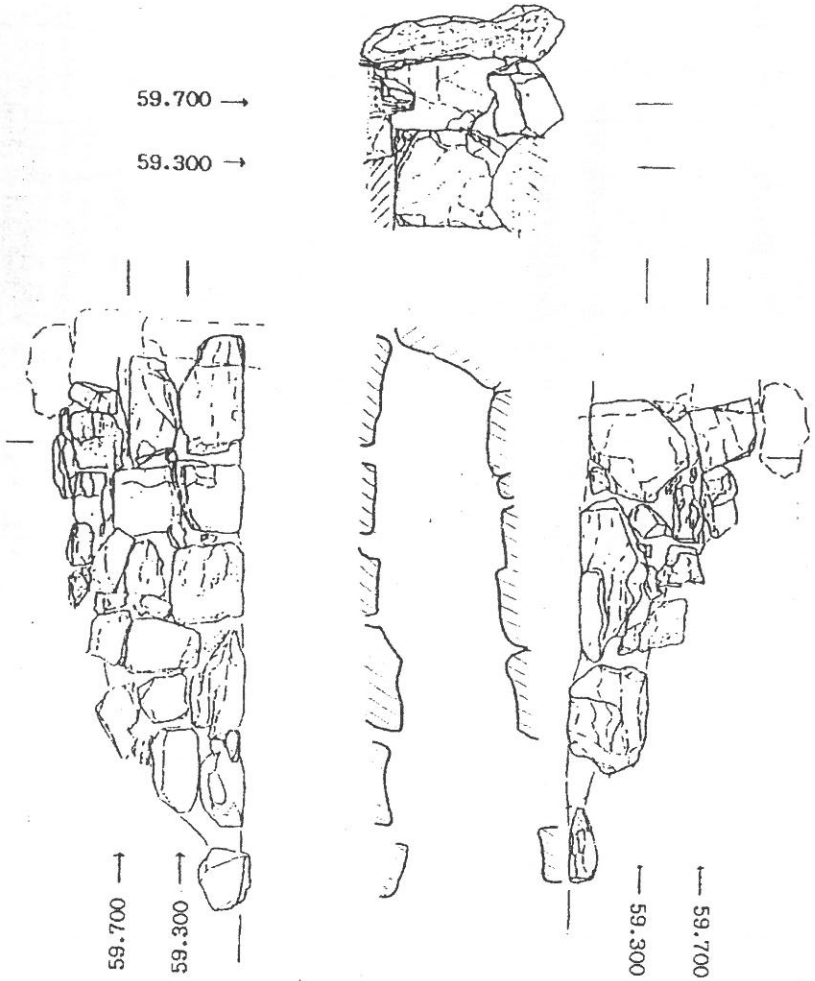
副葬品は玄室の奥壁付近から須恵器の坏身と蓋が、右側壁床面からは須恵器の坏・平瓶・土師器の甕、左側壁床面からは鉄製刀子が出土している。

石室内出土の遺物

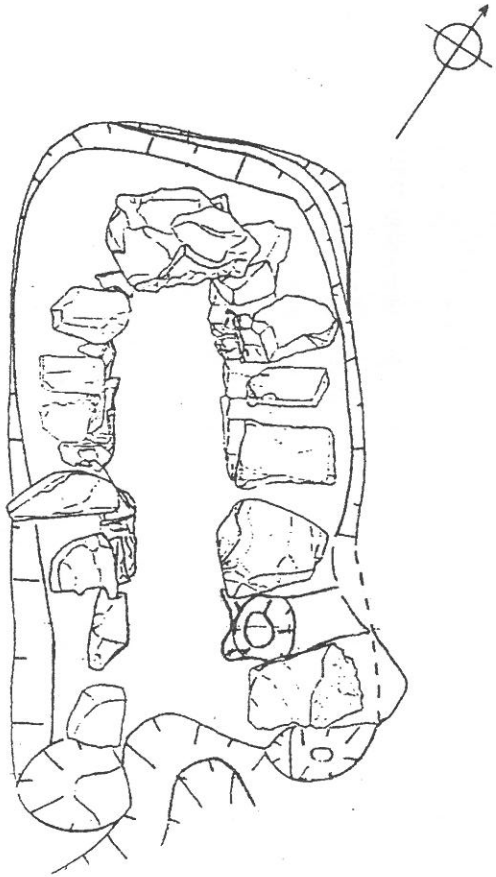
須恵器　　坏身３点・蓋１点・坏２点・平瓶１点

土師器　　甕１点

鉄製品　　刀子１点



第1図 滝見A古墳石室展開図(更正中) S−1／50



第2図 滝見A古墳石室・掘り方平面図(更正中) S−1／50